市立病院通信-(125)-

お元気ですか

このコーナーでは、病院施設や事業のほか、生活に役立つ“健康豆知識”などを紹介します。

骨・ミネラル代謝異常の病態栄養学的背景に関する研究（学会功労賞受賞 特別寄稿）

市立長浜病院
ヘルスケア研究センター長
石田均

この度、歴史ある日本栄養・食糧学会の功労賞を受賞する機会を、私が京都大学大学院時代から40年近く継続している研究テーマのもとで、幸いにも賜ることとなりました。

生活習慣病の代表例としてよく知られている糖尿病や脂質異常症などを発症すると、骨を形成する骨芽細胞の働きが弱くなる一方で、逆に骨を吸収する破骨細胞の働きが相対的に強くなっていきます。そして人は年齢を重ねると全身の骨量が自然に減少していきます。

しかしここに糖尿病や脂質異常症などが一緒に存在すると、年齢による生理的な骨量減少がさらに早く進むことで、困ったことに骨がとても脆くなってしまいます。もしもこのような状態で誤って転んだりすると、思いのほか簡単に骨折を生じて、ついに寝たきりになってしまう危険性がかなり高くなります。

したがって生活習慣病をはじめとする基礎疾患にならないように、健診や人間ドックでその発症予防に日頃から努め、さらに加齢への対策として骨や筋肉を強くすることで、何ごともなく長生きができる健康寿命の延長が、どなたにでもすぐに可能となります。

ヘルスケア研究センターでは、今年度から加齢対策のための新たなオプション検査として、「体成分分析検査」と「筋力測定検査」を用意しました。これらの検査で身体の中の筋肉や骨ミネラルの量、そして筋肉の強さを正確に判定して、さらなる健康寿命の延長をめざしていただければと思います。

これからもセンター員一同とともに、よろしくお願いします。

▲石田センター長(前列中央)

問 市立長浜病院ヘルスケア研究センター ☎68・2335

●市政に関するご意見

たに折り

●広報ながはまに関するご意見
（今後、特集を希望するテーマ）

年齢　　歳（　男性　・　女性　）

※担当課からの返事をご希望の場合は、氏名・ご住所・連絡先（電話・メールなど）をご記入ください。

シリーズ(13)

ながはまの文化財

市内には、国や県、市が指定した文化財がキラ星のごとく尖り輝いています。このコーナーでは、数ある文化財の中から代表的なものをシリーズで紹介します。

滋賀県指定有形文化財「全長寺本堂」

指定日：昭和62年3月30日指定
所有者：全長寺

久澤山全長寺は、慶長2年(1597)余呉町池原字新堂で頤正全養禅師が開いた曹洞宗の寺院です。慶長7年(1602)に東野・池原(新堂を含む)・国安・今市の4か村からの寄進を受け、寛永2年(1625)に現在の池原字杉の森に移りました。

現在の本堂は、十世泰蟠道龍禅師のとき、15年の歳月を費やして建立したもので、建築年代は、棟札により寛政元年(1789)と判明しています。

本堂は、基本となる内陣とその両側の間、内陣前室とその両側の間の6間取に2室を接続した8部屋で、正面側の土間部分に広縁を設ける間取を基本とする「方丈型本堂」の発展した形式で、365㎡の大面積を有します。建物は後世の改造部分も少なく、18世紀末の曹洞宗大型本堂の発展した形態を示しているため、県の指定文化財となりました。

規模の大きい屋根は入母屋造で、全面が波型鉄板で覆われていますが、元は葭葺であり、急勾配の高い屋根は、雪深い地方特有のものです。本堂の玄関部分は、柿葺の破風板の中央部が起り、左右両端が反った「唐破風造」の屋根となっています。

寺宝「心経竹軸物」、「達磨大師画像」など所蔵品が多数あり、かつて池原集落の別所山に存在した天台宗万福寺の本尊であった「馬頭観音菩薩像」も全長寺境内の観音堂に移されています。

全長寺は別名「あじさい寺」と呼ばれ、6月下旬～7月上旬にかけて、50種類約1千本のアジサイが咲き乱れる風景は圧巻です。また、賤ヶ岳の戦いで活躍し、柴田勝家の身代わりになった毛受兄弟の供養寺であり、伊香西国第25番の札所でもあります。

▲全長寺本堂

問 歴史遺産課（☎65・6510）

ながはまの自然不思議発見！

エピソード 14
「彼岸花」

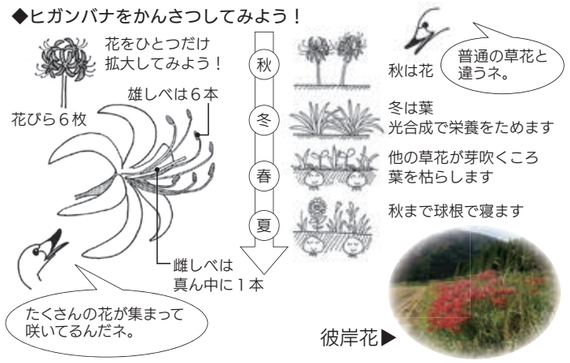
このエピソードを紹介するおもしろ動画はコチラ

今月は、秋の深まりを感じさせる里の花「ヒガンバナ」のエピソードを紹介します。

彼岸の入りの頃に美しい花を咲かせることから名前がついたとされるヒガンバナは、市内の畔や土手などで見られる秋を代表する花で、「曼殊沙華」や「お盆花」など様々な別名で呼ばれています。市内でも徳山町などの大きな群落があるところでは、赤いじゅうたんのように土手一面に咲き、見物客やカメラマンで賑わいます。

実は、ヒガンバナは日本にもともと生えておらず、室町時代以前に中国大陸から持ち込まれた花で、球根に毒があることから、モグラ・ネズミ除けとして畔や土手に植えられたり、毒抜きをすると食べられることから飢饉の際の非常食とされたりし、日本各地に広まったとされています。

◆ヒガンバナをかんさつしてみよう！



彼岸花▶

2014年、市環境保全課が「身近な環境調査」として、市民の皆さんからの情報をもとに、ヒガンバナの分布図を作った際、浅井地域や余呉地域の山林にも見つかり驚かされました。今は誰も生活をしていない森ですが、昔は人が生活していた場所だと分かったことは興味深い結果です。

古より人々に愛され広げられてきた花「ヒガンバナ」にこの秋、注目してみてはいかがでしょうか。

問 湖北野鳥センター（☎79・1289）